

举一反三

← 中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から ← 文と訳 ういくす 有為楠 君代

今回は、孔子さまのお話です。植田先生が、論語のお話をしてくださっているのに、ここで孔子の話を出すのは気が引けますが、中国で、しかも小さな子供たちに聴かせているお話だと改めて皆様の注意を喚起した上で書いてみます。

「孔子は春秋時代の大教育者です。孔子は、かつて自分の学生たちに言っていました。

『私が一つの知識を教えても、お前たちがそれに関連した別のことを連想して理解することが出来ないのなら、もう、私の学生でいてはいけない(やめてしまいなさい)』

後世の人は、この孔子の言葉を簡単にして、現在の成語「举一反三」を作りました。意味は、もし一つの道理(物の考え方)を習った後で、同じような問題に直面した時、習ったことを基に、考えを巡らせて(知識を応用して)その問題を解決出来なければ、学んだことが身についたとは言えない、ということです。

言葉の説明としては、「一つのことから類推すれば、その他のたくさんを知ることが出来る。類推によって広く理解する「触類旁通」のたとえ」として、ここで更に難しい成語が出て来ています。「触類旁通」とは、「類推によって広く理解する」、「一つの事柄から、類推して他を理解する」という意味だそうです。

例文は、「先生の指導の下で、学生たちは「举一反三」(知識を基に、類推して)、活発な討論を繰り広げた」となっています。

言葉の説明にしても、例文にしても、日本ではこのような話、未就学児童には分からないだろうと思ってしまうのですが、漢字の国中国としては、当然のこととして教えるのですね。何といっても漢字発祥の国ですから、小さい時からなるべく多くの漢字で、沢山の意味を教えようとしているのでしょうか。

この言葉、日本では「一挙三反」となって使われています。この語は、「四隅を持ったものの一つを取り上げて教えてもらったら、あとの三つの隅のことは自分で類推して問い尋ねること。才知がすぐれていること。孔子が弟子を啓発する教育態度を述べたもの」と紹介されています。

これと同じような意味で、やはり孔子に関係した言葉としては、この本の少し後の方で「聞一知十」と

いうのが出て来ますが、この四字成語、日本では四字の儘では使われず、もっぱら「一を聞いて十を知る」という言葉で表されています。

この「一を聞いて十を知る」というのは「成句」とか「ことわざ」という言葉でくられます。「井の中の蛙大海を知らず=井蛙之見」、「人間万事塞翁が馬、禍福は糾える縄の如し=塞翁之馬」、「天高く馬肥ゆる秋=秋高馬肥」、「鶏口となるも牛後となるなかれ

=鶏口牛後」、「馬の耳に念仏=馬耳東風」、「桑田変じて蒼海(青い海)となる=桑田蒼海」等は皆、四字成語を分かり易い言葉で表したもので、数え上げたらきりがありません。日本の日常生活では、この「成句」の方が頻繁に使われていますね。

多くの「成句」は、中国の「四字成語」を下敷きにしていますが、日本独特の成句もあります。特に「いろはかるた」には日本の社会を映したことわざが多いようですが中には中国の四字成語を基にしているものもあります。同じことでも表し方が違ったり、時には意味も微妙に違ったりするから面白いですね。

「いろはかるた」の中の「子は三界の首枷」とか「年寄りの冷や水」というような、ちょっと自虐的なことわざは、中国には見当たりません。昔からの中国社会の親子関係、老人観などからは考えられないのでしよう。

